

民俗芸能の伝承における役割の分離と統合：  
静岡市久能地区の羽衣の舞の伝承を事例に

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2024-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: ジン, タオ メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10297/0002000601">http://hdl.handle.net/10297/0002000601</a>

# 民俗芸能の伝承における役割の分離と統合

～静岡市久能地区の羽衣の舞の伝承を事例に～

ジン タオ (Jin Tao)

- 1 はじめに
- 2 久能の羽衣の舞の歴史
  - 2.1 久能の羽衣伝説
  - 2.2 天羽衣神社
  - 2.3 羽衣の舞の発展
    - 2.3.1 舞の形の変遷
    - 2.3.2 運営者・伝承者の変化
- 3 近年の羽衣の舞の展開
  - 3.1 2010 年の中止と 2011 年の再開
    - 3.1.1 組織構造の改変
    - 3.1.2 新しいメンバー募集および練習の形
  - 3.2 2019 年以降の状況
    - 3.2.1 2019 年から 2022 年の中断
    - 3.2.2 2023 年再開の準備
    - 3.2.3 2023 年天羽衣神社大祭
    - 3.2.4 祭りの後
- 4 考察
  - 4.1 運営・伝承の分離
  - 4.2 運営・選定の統合
  - 4.3 出演・伝承の分離と再統合
  - 4.4 分離と統合過程から見えるもの
- 5 おわりに

## 1 はじめに

久能には古くから羽衣伝説が伝承されている。さらに久能の中平松には天女を祀る天羽衣神社（あめのはごろもじんじゃ）があり、そこでの「羽衣の舞」という伝統行事はすでに

100年以上の歴史があって、これまで中断・改変・再開を繰り返してきた。

本章は、羽衣の舞という行事のこれまでの歴史および、2023年の再開における伝承過程の変容に着目し、その過程に見られる祭りの運営・出演者の選定・芸能の出演・芸能の伝承という4つの役割の分離と統合について分析する。

## 2 久能の羽衣の舞の歴史

中平松にある天羽衣神社は天女を氏神として祀っている。氏子である西平松、中平松、青沢からなる3町を中心に、毎年10月に天羽衣神社大祭を行い、そこで羽衣の舞が奉納される。

### 2.1 久能の羽衣伝説

久能に伝承されている羽衣伝説は古く、『貞応海道記』、『童蒙抄』などの古籍に記録を残している。『久能の昔を伝えるもの』によると、伝説では有渡浜（有度浜）に天女が降りて遊んでいたところ、漁師に羽衣を隠され天に戻れなくなった。そこで3年間塩焼を業としたのちに没したとされている（静岡市立久能小学校編1982：149）。また、天女が八幡宮でお祓いをし、霊力を取り戻したという説もある。天女は最後、天に戻る代わりにこの地の氏神となった（天羽衣神社碑石）。同様の羽衣伝説は日本各地にあり、それぞれ共通点と相違点がある。久能に伝わる羽衣伝説は天人の土着を語るものであり、石川純一郎はそれを「地上滞留型」として分類している。「地上滞留型」は、京都府弥栄町の奈具神社と中平松の天羽衣神社にしか見られない希少なものである（石川2000）。

### 2.2 天羽衣神社

『久能』によると、中平松の天羽衣神社は江戸時代以前から天女を西平松、中平松、青沢3地区の氏神として祀っている（静岡市立久能小学校創立100周年実行員会編1992：91）。

『久能の昔を伝えるもの』の記載では、天羽衣神社そのものは創建年月不詳であり、「明治8年2月、お社に列し、同11年11月に今の社号に改めた」。そして、「昭和27年8月、宗教法人登記、昭和40年9月、本殿、拝殿を鉄筋コンクリート造りに改築した」（静岡市立久能小学校編1982：149）。

### 2.3 羽衣の舞の発展

久能での調査中、羽衣の舞の歴史について詳しく調べたことのある西平松在住の海野伸光さん（75歳）の語りを記録することができた。

伸光さんは1986（昭和61）年に宮崎から西平松に移住した。子ども時代に地元の夜神楽

を観て育ったため、伸光さんは中平松の羽衣の舞にも興味を持つようになった。さらに、羽衣の舞の歌には武島羽衣が作詞した「美しき天然」の一部が入っており、伸光さんはそれを不思議に感じ、その理由を究明したいと思っていた。そのため、2011年に天羽衣神社総代を務めていた間、伸光さんは天羽衣神社に残された記録を調べ、さらに羽衣の舞の参加者だった人々にインタビューを行い、羽衣の舞について詳しく調査した。以下は伸光さんの羽衣の舞の歴史についての調査結果を一部参照にしたものである。

### 2.3.1 舞の形の変遷

まずは舞自体の移り変わりを見てみよう。『久能の昔を伝えるもの』によると、明治時代にはすでに秋の大祭に娘たちが舞って奉納するという習わしがあった（静岡市立久能小学校編 1982：150）。伸光さんによれば、当時の舞では、踊り役は天人役と漁師役2人のみであり、舞台の裏から4、5人が口で波の音を出すという形式だった。すべての踊り手は大人であり、歌詞は候文だったという。

時代が移り、羽衣の舞は昭和初期に一度中断したことがある。『久能の昔を伝えるもの』の記載によれば、「昭和4年御大礼記念として、女子青年にて復活し、祭りの目玉として、近隣のみならず、静岡の町からも多くの見物人を集めていた」（静岡市立久能小学校編 1982：150）。伸光さんによると、羽衣の舞の歌がそこで新しいものになった。候文の歌は難解であるため、その代替として、比較的わかりやすい今の歌詞を久能小学校の教師たちが作ったという。また、伸光さんの調査によると、この時期に、「美しき天然」の作詞者である武島羽衣が療養中の友人を訪ねるために一時期久能に滞在したことがあるという。その際、久能小学校の教師たちが武島に頼み、「美しき天然」の一部を羽衣の舞の歌に加えた。さらに、教師たちによって舞の改変もされた。天人、漁師役に加えて、バックダンサー的な役割の星役4、5人が追加されたという。

### 2.3.2 運営者・伝承者の変化

橋本裕之によると、1970年代から、全国範囲で保存会という新しい組織が民俗芸能の伝承の主体になってきたという（橋本 2014：142）。久能の羽衣の舞でも例外ではない。

伸光さんによれば、戦後に3町の女性の進学率や出稼ぎ率が次第に上昇した。その結果、羽衣の舞を担う女子青年団は解散し、舞の継続が困難になったという。『久能の昔を伝えるもの』によると、舞は昭和30年代から中断され、1979（昭和54）年再開まで20年間近く途絶えていた（静岡市立久能小学校編 1982：150）。しかし、伸光さんが当時の会計帳面から得た結論は、途絶えていたと思われる時期に大祭と舞が下火になっただけで、実際中断し始めたのは1972（昭和47）年からである、というものだった。そして、1974（昭和49）年の七夕豪雨で、天羽衣神社に建物が損害を受けたため、舞の再開ができなかったという。

『羽衣の舞』によると、1978（昭和53）年から1979年にかけて、羽衣の舞という伝統が失われることを恐れ、当時天羽衣神社総代である海野京一さんを中心に、羽衣の舞保存会が発

足した。そこを拠点に、人々は舞の復活に向けて準備を進め始めた。天羽衣神社内で発見された舞の衣装や歌詞、実際に舞に参加したことがある方々の指導によって、羽衣の舞の再現に成功した。さらに、当時久能小学校校長だった岩田功さんが全面的な協力を約束し、すでに解散した女子青年団の代わりに、久能小学校の3町の5・6年生が羽衣の舞の踊り役を継承することになり、さらに前の年の舞に参加した上級生が次の年に下級生に振り付けを教えるという体制が確立された。それによって、1979年から羽衣の舞が復活した。その年の大祭は盛大に祝われ、羽衣の舞もメンバーを入れ替えて、天羽衣神社、老人ホーム、静岡市民文化会館などの場で合計6回行われた（羽衣の舞保存会、天羽衣神社氏子総代会1983）。

### 3 近年の羽衣の舞の展開

1979（昭和54）年の再開以降、羽衣の舞は無事今日まで伝承を続けることに成功していたが、その過程は決して順風満帆ではなかった。本節は、近年の羽衣の舞の伝承における重要な展開をまとめる。

#### 3.1 2010年の中止と2011年の再開

1979（昭和54）年再開以降、羽衣の舞は台風やメンバー不足などの原因で中断と再開を繰り返したが、2010年の中断をきっかけに、天羽衣神社の運営組織の構造が大きく変わった。その結果、メンバーの募集範囲が広げられ、2011年に舞は新たな陣容で再開された。

##### 3.1.1 組織構造の改変

伸光さんによると、天羽衣神社の運営を担当するのは、3町の自治会役員と神社側の「お宮の役員」である。自治会役員は3町の自治会長および副町会長が務める。そして、自治会長自体の任期が2年間であるため、3町の役員も2年周期で交代する。一方、「お宮の役員」に任期の制限がなく、その結果、長い任期を務めてきた「お宮の役員」は運営において絶大な決定権を持つことになった。

しかしながら、この構造は2010年をきっかけに大きく変わった。過疎化・少子化の影響で、久能小学校の在校生数が減少の一途をたどり、2010年の羽衣の舞はメンバー不足が原因で中止になった。この現状を変えるために、3町の役員は踊り役の小学生の募集を3町から同じ久能地区の安居・古宿・根古屋も含む6町にまで拡大することを提案した。しかし、「お宮の役員」は「氏子である3町だけでやるべきだ」と主張し、それに強く反対した。双方の対立の結果、当時在任中の「お宮の役員」は引退し、新しい「お宮の役員」が3町から選出され、さらに2年間という任期が設けられるようになった。これによって、募集範囲は6町に広げられ、また、久能小学校の生徒なら学年問わずすべての生徒が募集対象になった

という。

### 3.1.2 新しいメンバー募集および練習の形

伸光さんの語りによると、それまで子どもたちに羽衣の舞を教えてきた海野早苗さんが2011年に体調を崩し、継続が困難になった。そして、早苗さんの後継者として、伸光さんの奥さんと同級生だった、中平松出身の日本舞踊藤間流師範だった藤間勘穂泉さんが指導役を引き受けた。藤間さん自身は実際羽衣の舞に参加したことはないが、ビデオ映像をもとにアレンジを加え、羽衣の舞を再現したという。

一方、メンバー集めの方では、募集範囲が拡大されたとはいえ、募集は簡単ではなかった。難点の一つは安居・古宿・根古屋在住の子どもの親の説得だった。実際の最終決定権は子ども本人ではなく、その親の方が握っているからだ。まず、天羽衣神社の大祭はこれまで主に氏子である3町に向けてのお祭りであり、羽衣の舞も3町の子どものみしか参加することができなかった。そのため、安居・古宿・根古屋での大祭および羽衣の舞の認知度が高いとはいえない。伸光さんたち役員が募集のために子どもの家に訪ねるとき、「羽衣の舞？それ三保じゃない？」と反応する親が多数いた。「知らないから興味ない」と断る親もいたという。

それから、舞の練習の時間帯や子どもの移動手段も難点である。2011年までは、練習は土日の夕方から中平松公民館で行ってきた。中平松公民館は3町の真ん中の位置にあるため、3町の子どものみにとっては身近にある。しかし、逆に言うと、3町の外側から来る子どもの移動には時間がかかる。特に夕方以降の移動は不安要素を孕む。そこで、藤間さんの提案で、練習は夏休み中の昼に集中的に行うようになり、このような練習の形は今日まで続いている。さらに、移動に時間がかかる子どもは、伸光さん家族が送迎するという一方で、移動の問題は解決したという。

このようなさまざまな新しい取り組みによって、2011年には12名の参加者が確保でき、羽衣の舞は無事開催することができたと伸光さんは語った。

このあと、保存会メンバーの入れ替わりがあるものの、羽衣の舞は無事令和の時代を迎えることができた。

## 3.2 2019年以降の状況

しかしながら、台風15号および新型コロナウイルス感染拡大の影響で、2019年から2022年の間、天羽衣神社大祭での舞の披露は中止になった。しかし、コロナ感染の収束をきっかけに、2023年の大祭および羽衣の舞の復活を目指し、役員たちが再び動き出した。

### 3.2.1 2019年から2022年の中断

2011年から羽衣の舞の指導を担ってきた藤間さんはブログで2019年から2020年までの状況を記録していた。2019年は台風の影響で中止になったものの、夏に羽衣の舞の準備や練習は行っていた。藤間さんは舞の中止を残念だと思っていて、特に頑張って練習をしたの

に本番で披露できない子どもたちに対して心を痛めていたという（藤間 2019）。そのため、2020 年、コロナ感染拡大のため羽衣の舞にも開催の見込みがないと見越して、藤間さんは 11 月に「宗家藤間流・日本舞踊教室」が主催する日本舞踊発表会「藤泉会」に羽衣の舞を誘い入れ、子どもたちに舞台を用意したという（藤間 2020）。しかし、2021 年および 2022 年に舞の練習が行われた記録はなかった。

### 3.2.2 2023 年再開の準備

2023 年 4 月に、中平松在住の佐野徹さん（67 歳）が天羽衣神社氏子総代表・羽衣の舞保存会会長に就任した。佐野さんは 18 歳のころに静岡県藤枝市から中平松に引っ越してきた。佐野さんによると、引っ越しの直後は周りとお世話になったことがあり、それから他の人の気持ちに寄り添いたい、人のためになりたいと思えるようになったという。その後、佐野さんは体育委員から始め、現在は神社の総代だけでなく、民生委員をも務めているという。

2023 年春、政府がコロナの収束を宣言した。そして、総代になってすぐ、佐野さんは羽衣の舞の再開のために奔走し始めた。一番の問題はやはり参加人数である。2011 年以降、久能の過疎化・少子化がさらに進み、久能小学校のホームページによると、2023 年現在の在校生数はわずか 22 名になった（久能小学校 2023）。そこで、佐野さんたち役員は、地元の子どもの参加を可能な限り確保するために久能での宣伝を徹底的に行った。それだけではなく、佐野さんは民生委員のつながりで、久能に隣接する大谷地区の有力者にもお願いし、大谷小学校で宣伝する協力の約束を得た。さらに、静岡大学の学生である筆者に大祭の宣伝ポスターの作成や静岡大学内の宣伝を依頼し、大祭そのものの知名度上げを図った。

しかし、5 月末に 2011 年から羽衣の舞の指導に心血を注いできた藤間さんが病気で亡くなり、状況が一変した。まず、2021 年、2022 年の大祭や舞の中止が原因で、舞の練習が行われておらず、舞に実際参加したことのある最後の世代がすでに卒業し、ほとんどが久能を離れた。これで、2023 年の参加者に振り付けを教えられる人が実質いないという状況になった。さらに、佐野さんによると、指導者が不在ということから、羽衣の舞が開催できる確実性がなくなり、大谷地区へのお願ひも頓挫したという。この状況を打破するために、佐野さんは大谷小学校に通っている久能在住の生徒たち（とその親）に個人で訪ね、参加するようお願いした。それから、指導者不在の問題を解決すべく、佐野さんは 2020 年「藤泉会」の羽衣の舞の映像の DVD を作成し、参加者に配布した。さらに、筆者の紹介で静岡大学教育学部の上野彩花さん（20）が指導役を引き受けた。上野さんは「藤泉会」の映像をもとに振り付けを再現し、子どもたちに教えることを約束した。

上野さんによると、映像はきれいなものだけど、それだけで舞を再現することは簡単ではなかった。細部を拡大し、「ここの動きはこうにしよう」という自分自身の推測や解釈も入れながら、舞を比較的忠実に再現できたという。

そして、8 月から 10 月 15 日の本番にかけて、上野さんと舞に参加する久能小学校生徒 4

名および久能在住の大谷小学校生徒3名が、中平松公民館で15回の練習を経て、大祭当日に臨むこととなった。



写真1 羽衣の舞の舞台（2023年10月15日、ジン撮影）

### 3.2.3 2023年天羽衣神社大祭

大祭前日の10月14日に、保存会役員たちや近くに住む人々からなる二十数人が天羽衣神社の前に集まり、神社および観客席となる天羽衣公園に面する舞台の組み立て作業をし、さらに天気予報にもとづいて大祭当日のスケジュールを調整した。大祭当日の午前10時に雨が止み、神輿のあと、数十名の観客が徐々に舞台の周りに集まってきた。久能在住の人々に加え、県議員や市議員、そして久能小学校校長と久能こども園園長も参加した。13時15分から、その日の目玉である羽衣の舞が奉納された。子供たちが舞台装束を身に纏い、ひらひらと舞う姿を、観客の人々はしっかりと目に収めていた。羽衣の舞は主役の漁師と天女を入れ替えて2組奉納され、そのあと、上野さんを交えてさらに「竹千代殿どん」、「まるちゃんの静岡音頭」、「いちご音頭」の3曲目を踊った。

そして、閉会式では、保存会会長である佐野さんによる閉会宣言がされた。就任から波乱の半年を経て大祭を無事再開させることができ、佐野さんは涙をこらえながら背中を支えてくれた人たちに感謝の言葉を捧げた。

### 3.2.4 祭りのあと

大祭のあと、この年の羽衣の舞において中心的な位置にいる上野さんと佐野さんが次の



年の準備について語った。

「まさか私もそこで踊ることになるとは。ジンさんからは羽衣の舞しか言われなかったのですが、私4曲も教えましたからね」と上野さんは満面の笑顔で筆者に文句を言っていた。しかし、上野さんは弓道部とよさこいサークルを兼部しており、来年の夏は忙しくなり、指導に参加できないという。「多くても2、3回しか来られないと思います。でも今年の漁師と天女役の子4人は全員まだ4年生ですから、来年はそんなに心配する必要がないかもしれません」という。

そして一番の功労者である佐野さんの任期は来年の3月までであるため、「新しい先生(指導者)を探すのは来年の会長に任せるよ。ルールはもう作ったから」という。筆者の意見ではあるが、これは次の年の舞における不確定要素になるだろう。



写真2 天羽衣神社大祭 (2023年10月15日、ジン撮影)

#### 4 考察

久能の羽衣の舞の保存において不可欠なのは、大祭の運営、出演者の選定、確保、そして羽衣の舞そのものの伝承である。今日までの羽衣の舞の変遷、特に中断からの再開から、運営、選定、出演、伝承、この4つの役割の分離や統合が見られた。本節では、羽衣の舞の1979年、2011年、そして2023年の再開を分析し、この分離と統合が保存にどのような影

響を与えたかを明らかにする。

#### 4.1 運営・伝承の分離

1979年に羽衣の舞保存会が設立され、天羽衣神社大祭および羽衣の舞という行事の運営者とその役割を明確化した。そして、すでに解散した女子青年団から久能小学校の3町の女子生徒に出演者を変更し、指導役を設置した。これによって、運営と伝承の役割が分離された（一方、上級生が下級生に舞を教えるという慣習が存在するため、出演者である久能小学校の女子生徒は指導役である早苗さんともに伝承の役割を担ってきた）。

この体制の変化は、舞の再開において必要不可欠な過程である。運営と伝承の分離は、運営の役割の分業化と明確化を進め、大祭の準備を効率化、確実化した。羽衣の舞は大祭の演目の一つであり、さらにその神社で祀られる氏神である天女が主人公であるため、羽衣の舞と大祭は分割不可能なほどのつながりがある。そのため、大祭の開催は、羽衣の舞の舞台が用意されるのと同義である。

#### 4.2 運営・選定の統合

それから、1979年まで舞が中断になった原因は女子青年団、すなわち出演者の不在であり、代わりになれる出演者層である小学校女子生徒は幼いゆえ、選定すること、たとえばその年の出演者の募集範囲や漁師や天女役の人選を決めることは困難である。その意味では、選定の役割が運営に統合されることは必然である。実際、1979年だけではなく、2011年や2023年においても、運営者という強い決断力と執行力を持つ主体が伝承者選定の役割を担うことが、出演者の募集範囲を再設定し、十分な人数の確保において大きな貢献を果たした。

一方、指導役という伝承者に選定の役割を任せることも可能だ。しかし、指導役は久能在住の早苗さんから久能出身だが若い頃から他地域に移住した藤間さんになり、そして2023年の舞の指導役を務めた上野さんと久能のつながりはさらに薄くなり、選定を担うことが徐々に困難になる。つまり、結果から見て、運営と選定の統合は最善策だといえるだろう。

#### 4.3 出演・伝承の分離と再統合

1979年において、出演者である久能小学校の生徒は、伝承者の役割も兼ね備えていた。上級生が下級生に舞の振り付けを教える制度があり、その確実性を当時の小学校の在校生数が保証した。しかし、この仕組みの背後には潜在的な不安定性が潜んでいる。2023年を例にすると、舞が2年間中断したあと（2019年および2020年では大祭が中止になったが、「藤泉会」での上演があったため、中断とは言えない）、実際に舞に参加したことがある生徒は全員卒業し、さらに久能外に進学したため、教える側になれるような生徒がいない、すなわち伝承の役割を果たせないという状況になった。羽衣の舞においての主役である天人や漁師を演じるのが高学年の生徒であり、さらに近年では卒業後に久能を離れることが多

く、生徒が伝承者としていられるのは高学年になってから卒業までの2、3年間だけである。その結果、このような仕組みは2年間以上の中断が発生する場合、出演と伝承の役割が一旦分離され、その後、舞経験者の在校生が生まれ次第、両者は再統合される。

このような分離が発生する場合、上級生が下級生に舞の振り付け教えるというシステムは自力で回復することができないため、生徒以外の伝承者の存在が必要になる。早苗さんと藤間さんが指導役だった時期では、指導役がこの役割を担い、伝承の安定性を考慮するなら、むしろ指導役の方が主要な伝承者だといえるだろう。しかし、2023年においては、指導役が不在という状況が発生し、伝承の役割を果たしたのは、舞の映像を保存したメディアである。「無形民俗文化財映像記録作成の手引き」によると、映像記録を作成する目的は「記録保存」、「伝承・後継者育成」、「広報・普及」の3つに分けられる。往々にして、この3つの目的を厳密に分けることはないが「少なくとも製作の主たる目的はどこにあるのかを意識することが必要」であり、「伝承・後継者育成」を目的とする場合、「ディーテルにまでこだわった身体のおわぎの具体的な記録」が求められるという（国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部編 2008：7）。羽衣の舞保存会にあるこれまでの舞の記録は写真をメインとしており、数少ない映像データも「記録保存」用のものである。その意味では、「藤泉会」での映像がきれいな状態で見つかったことは幸運であろう。そして、過疎化・少子化が進むなか、今後久能以外の地域に協力を求めることも増えるのだろう。その場合、「広報・普及」のための映像も作成する必要がでてくる。このことは、羽衣の舞の伝承においては急務かもしれない。

#### 4.4 分離と統合過程から見えるもの

以上の分離と統合の過程は、羽衣の舞や大祭を存続させるための人々の工夫に他ならない。運営と伝承・出演の役割の分離によって、組織の効率が向上され、出演者の確保がしやすくなる。そしてこの過程からは、羽衣の舞における「民俗」と「芸能」の関係性が見えてくる。

民俗芸能は芸能の部分だけではなく、伝承する地域の民俗、すなわち習わしをも内包することは自明である。ここでは、伝承の地域や人々から離れても再現できるものを「芸能」と定義し、その芸能と密接に関わるその地域特有の習わしを「民俗」と定義する。この定義に従うと、大祭の運営や出演者の選定（氏子に限定するかどうか）は「民俗」の領域にあり、羽衣の舞そのものの指導・出演が「芸能」の伝承にあたる。つまり、羽衣の舞の伝承に見られる運営と伝承の分離は、民俗芸能における「民俗の伝承」と「芸能の伝承」の役割の分離でもあるといえる。

しかし、伝承の役割の分離は、「民俗」と「芸能」の分離を意味するわけではない。羽衣の舞の場合、両者の結びつきがむしろ昔から強固である。まず、羽衣の舞は地域の行事である天羽衣神社大祭の目玉であり、踊り役たちはさらに「竹千代殿どん」などの後続の演目も担当する。逆に、藤間さんが亡くなり、藤泉会という舞台を失った現在、大祭は羽衣の舞を

上演できる唯一の場となっている。つまり、羽衣の舞における「民俗」と「芸能」の部分は相互依存の関係である。

それから、羽衣の舞は地域の氏神である天女の伝説再現する祭事であるため、「この地域」にある「天羽衣神社」の「大祭」で、「氏子」たちが舞を捧げることに「民俗」的な意義がある。特に、踊り役が氏子であるということが重要だった。2011年の伸光さん事例のように、踊り役を選定範囲を拡大する際、「氏子だけでやるべきだ」と長老たちに強く反対された。当時は人数不足で拡大しない限り舞の再開が困難の状況にあるため、それまで羽衣の舞と長く関わってきた長老たちが「民俗」である氏子の伝統をいかに大事にしていたことがわかる。結果的に選定範囲の拡大がなされ、舞の再開が成功したが、これは、「芸能の伝承」のために「民俗の伝承」が譲歩したといえるだろう。一方、歴史を振り返ると、逆に「芸能」が「民俗」のために改変されたこともある。それは、1929（昭和4）年の復活において、難しすぎる舞が再創作されたことである。

このように、「民俗」と「芸能」の片方において伝承が困難になる場合、羽衣の舞に関わる人々はそれが存続できるようにもう片方を少し妥協させ、「民俗」と「芸能」を両立できるよう工夫してきた。

## 5 おわりに

本文は久能地区に伝わる羽衣の舞の昔と今を整理し、その伝承過程に見られる役割の分離と統合について論じた。その結論として、これらの過程は、「民俗」と「芸能」の伝承の役割の分離ではあるが、羽衣の舞において「民俗」と「芸能」の部分が同様に不可欠であり、それが両立できるよう人々は工夫を重ねてきたことがわかった。

この事例は、民俗芸能の「真正性」は「芸能」だけではないことを示唆する。荒木真歩は、民俗芸能における「真正性」を「保存したいと思うような一番古い芸態」と定義する（荒木 2018）。そして、羽衣の舞において、「芸態」は、「芸能」の部分だけではなく、「民俗」の側面もあることは明白である。そのため、研究や外部による保存支援の際、「芸能」だけではなく、「民俗」の部分とも対話しなければならないといえるだろう。

## 謝辞

本調査にあたり、たくさんの方々にご協力をいただきました。ご多忙のなか、未熟な大学生の調査にお時間を割いていただけたことに心より感謝の気持ちを申し上げます。

## 参考文献

荒木真歩

- 2018 「芸態からみる民俗芸能の『真正性』と『正統性』——奈良県の篠原踊を事例に」  
『現代民俗学研究』10：17-26。

石川純一郎

- 2000 「羽衣・竹取説話の源流と展開」静岡総合研究機構編『静岡と世界を結ぶ羽衣、竹  
取説話』静岡新聞社：105-156。

静岡市立久能小学校

- 2023 「校長あいさつ」静岡市立久能小学校ホームページ  
(2023年7月15日閲覧 [https://kunou-  
e.shizuoka.ednet.jp/aspsrv/asp\\_introduction/greet/default.asp?al=1](https://kunou-e.shizuoka.ednet.jp/aspsrv/asp_introduction/greet/default.asp?al=1))。

静岡市立久能小学校編

- 1982 『久能の昔を伝えるもの』静岡市立久能小学校 PTA。

静岡市立久能小学校創立100周年実行委員会編

- 1992 『久能』静岡市立久能小学校創立100周年実行委員会。

橋本裕之

- 2014 『舞台の上の文化——まつり・民俗芸能・博物館』追手門学院大学出版会。  
羽衣の舞保存会、天羽衣神社氏子総代会

- 1983 『羽衣の舞』天羽衣神社。

国立文化財機構東京文化財研究所無形文化遺産部編

- 2008 「無形民俗文化財映像記録作成の手引き」  
(2023年10月10日閲覧 <https://tobunken.repo.nii.ac.jp/records/8473>)。

藤間勘穂泉

- 2019 「台風の影響」はじめの一步——kanhosen.net  
(2023年7月15日閲覧 <http://blog.kanhosen.net/?month=201910>)。

- 2020 「『藤泉会』の番外編」はじめの一步——kanhosen.net  
(2023年7月15日閲覧 <http://blog.kanhosen.net/?month=202011>)。

南本有紀

- 2015 「復活する祭礼と民俗芸能 東日本大震災と岐阜県の事例から」『岐阜県博物館調  
査研究報』36：25-38。